



“グリースの詰替え” —ローヤル油機—

ご希望のグリースやオイルを右の容器に詰替えませんか。

1. 各種缶より 80g, 400g, 700g ジャバラに充填
2. 400g ジャバラより自動給油機（シマルーベ）に充填
3. 80g, 400g ジャバラより 20cc シリンジに充填
4. チェーンオイル等を自動給油機に充填

荷姿:80g, 400g, 700g ジャバラ 20cc シリンジ 自動給油機



「磐高物語」 15

私たちは、夏の雲の間から照り付ける太陽の下、晴れ渡った青空を望みながら最後の宿泊地中禅寺湖キャンプ場に向かった。

朝露を踏みしめながら青々と静かな湖面を見せる菅沼を横目に、重い荷物を背負いながらも皆元気に歩き始めた。

リーダーの山岸さんが、仲間を励ますように

『好い天気だ。峠越えには最高だし越えれば日光湯元の温泉が待ってつお』と、声をかけた。

『久しぶりで入る風呂は、最高だっぺな』と、真面目な高瀬さんが単頓狂な声を上げる。

『ようし、みんな湯元温泉目指してがんばっぺや』

疲れた疲れたと言っていた林さんが、珍しく大きな声を出した。

誰もが、汗まみれの身体を流し湯に浸かる幸せを峠の向こうに夢見ていた。元気が出た。

この旅の最大の難所と予想された群馬県と栃木県の県境にあ

『尾瀬の旅・第五日』

る金精峠の踏破に向かった。今でこそ車が十分通れる立派な舗装道路になっているが、当時は歩いて通る以外に無い山道だった。



丸沼のキャンプ場から林を通り森を抜け、やつとの思いで峠の頂上に着いたときは、

『ヤッター、ついに着いたぞお』誰ともなしに全員が声を出し、こぶしを空に突き上げていた。

眼下には、湯元温泉から立ち上がる白い煙と青い雫のような湯ノ湖が小さく見える。私たちは、先程までやつとの思いで足を運んでいたのを忘れたかのように、我先に坂を下った。

まずは、火照った身体を冷やそうと湯ノ湖で泳ぐことにした。皆パンツ一本になり、一番泳ぎの達人なリーダーの山岸さんを先頭に湖に飛び込んだ。

山岸さんが十メートルも行かないうちに引き返してきた。『みんな戻れ、水面の下はすげく冷てえ。泳ぐのは危ねえ』彼の機転で私たちは危機を脱した。

☆ あとがき ☆



今年の社内旅行は、北茨城市にある公共の宿「マウントあかね」に一泊の旅行でした。晩夏と初秋の狭間の心地好い一日に恵まれ、併設されたガラス工房で思い思いのキャンドルガラスや絵皿を作って楽しみました。

子供広場ではダンボールを使った芝そりやバトミントンに汗を流し、夜はいつもの通り賑やかな大宴会となりました。感謝のひと時でした。